



TITLE:

露西亞の新經濟政策と農業(二・完)

AUTHOR(S):

河田, 嗣郎

CITATION:

河田, 嗣郎. 露西亞の新經濟政策と農業(二・完). 經濟論叢 1927, 24(3): 496-512

ISSUE DATE:

1927-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128519>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 三 第

卷四十二第

行發日一月三年二和昭

論 叢

廣告稅論

教授 法學博士

神戶 正雄

ミルの社會學概念

講師 文學博士

米田 庄太郎

露西亞の新經濟政策と農業

教授 法學博士

河田 嗣郎

土佐の百姓一揆

教授 經濟學士

黑 正 巖

時 論

支那問題管見

教授 法學博士

末廣 重雄

說 苑

ブルゲン氏の諸社會主義評論

教授 法學博士

田 島 錦治

琉球の慶長役以後

教授 法學博士

山本美越乃

雜 錄

日銀指數利用の一指標

講師 經濟學士

蜷 川 虎三

伊太利のリラ貨引上策について

經濟學士

松 岡 孝兒

長週期景氣循環に關する一研究

經濟學士

菊 田 太郎

梅雨考

教授 法學博士

財 部 靜治

露西亞の新經濟政策と農業（二・完）

河 田 嗣 郎

四 農 業 信 用

戰前露西亞に在つては小資金の授受を行ふことを任務とする農業信用機關はかなり廣く行沙つて居た。そしてこの機關としては農村信用組合が最も活動して居たのである。然るに戰時及戰後に於ける紙幣の濫發は信用制度をして終に立つに處なきまでの困難に陥らざるを得ざらしめたが、特に共產主義政府が出来上つてからは、信用組合は共產主義的なる國家組織と經濟組織とに其の根本性質に於て一致せざるものなりとして一九一九年の末廢止せられることになつたものだから、農村金融機關は全滅する外はなかつた。それに元來共產主義は私經濟を認めず貨幣を否認し所謂信用制度なるものゝ必要と存在の意義とを認めないものであるから、所謂戰時共產主義の治下に於て露國の農村金融組織の破壊されたるは、言を俟たずして明かなる所である。

然るに新經濟政策の樹てられると共に信用組合の必要は再び認められるに至り、一九二二年十

二月二十二日の布告を以て再び公然承認せられることになった。けれども形の上でこそ復活したれ、その業務の實體に於て眞實に復活せんは中々の容易のことでなく、特に貨幣制度の不安定といふ事實は、信用制度の復舊を事實上可能ならしめなかつたのである。所が一九二四年の初に貨幣價值の安定が齎らざるゝに至つた爲めに、信用制度も茲に漸く復活の眞地盤を得て、農村信用組合の活動も漸く現實の問題となり得ることになった。

農村に於ける小額資金の授受を圓滑にせん爲めにソヴィエト政府は一九二四年の秋農業信用中央銀行を設立した。そして其の基本資金として四千萬留を國庫より支出し尙それと同額をば國家銀行より借用するを得るものとした。此の農業信用中央銀行は各自治共和聯邦に於ける同様の銀行とそして農業信用會社とを基礎として其上に立つべきものとし、此の組織の最後の地盤は産業組合組織による信用金庫たるべきものとせられた。尤も此等の農業信用機關はたゞ貧しき者に對してのみ資金の貸付を行ふのであつて、富裕なる人々に對して業務を行ふべきものにあらずとせられた。斯くて政府は一九二五年の春には既に一億留餘を農業信用の爲に用ゐたのである。

斯く政府が巨額の資金を支出しなければならなかつたのは、一つには共產主義的な立場から、斯かる信用制度をも中央から組織し上から下に築き下ろす風な組織として新たに造り出さんとした爲めだと信じられる。元來信用組合の如きは之を組織する人々が自治と共存共助との精神から

自發的に下から之を築き上げて行かなければならぬ性質のものであるのに、その信用組合制度が共產主義革命の爲めに有形的にも精神的にも破壊されて、人民の間にはまだ再び斯かる自助的努力を爲す氣風の復活しないのに、政府は例の共產主義的中央專制の立場から、之を國家的に上から造り下ろさんとして其功をあせつた爲めに、終に佛蘭西の信用組合制度に於て之を見るやうに、組合は只管政府の支出金にたよつて貸付資金を得んとするに至つた爲めである。と今一つには信用組合は元來一面に於ては貸付機關たると同時に他面に於ては貯蓄機關であらねばならぬもので、貯蓄として預入されたる零細の資金を集めて之を貸出資金として用ゆる所に其働が在るものだけに、共產主義治下の露西亞では貯蓄を爲せば搾取者と見られる恐ある所から、多少經濟に餘裕ある者も容易に預金を爲さず、又その預金を爲し得べき餘裕ある人々は農業信用の必要なものとして前述の如く之を排斥する方針が取られたものだから、組合としては預金による資金調達に道なく、止むを得ず貸付資金は只管に國庫の支給金に仰がんとするに至つた次第である。

それは兎に角として現今露西亞に於て農業の爲に用ゐられて居る資本はどんな狀況に在るかを見るに、戰前に於ては農民の固定資本は大約一八、四九七・七百万留と稱へられて居たが現今では大凡一五、〇七五・六百万留に減少したとせられる。そして戰前歐露に在つては農家一戸平均の固定資本は九九六留で經營資金は固定資本の二八・六%に當るとせられた。然るに一九二三年及

一九二四年の家計計畫の示す所では農家一戸平均の固定資本は戦前の留價に換算して八七六留六五と立てられて居る。之を經營規模の大小に依つて分類して示せば、

11 Desit. 以下の播種面積のもの	五三五・七〇
二・〇一——四・〇	六九五・一三
四・〇一——六・〇	九六四・〇九
六・〇一——八・〇	一一二三・〇四
八・〇一以上	一六四五・四〇

平均 八七六・六五

そして一九二三——二四年の家計報告によれば年々の増加率は二・四%である。

さて右に示す所はすべて貨幣信用に關してのことであるが、貨幣經濟の尙は未だ十分によく發達して居ない露西亞の農村に在つては、この外に實物貸付が必要とせられる場合が少くない。そしてそれは主に穀物其他の種子について行はれたのであつて、革命前に在つては此の目的の爲めには穀物準備資金なるものが在つて其働を爲して居たが、革命後にはそれは廢止された。然し革命後國家は巨額の穀物を其の手中に貯へて居るから、種子として必要なる穀物の貸付を行ふことは容易に出來得る所である。そこで一九二二年には國家より三千三百万ブード、一九二三年には

四千万ブード、一九二四年には二千六百万ブードの穀物が農民に貸付けられた。

又露西亞では従前から農民は農具其他の農業用資本財を信用買にして居る習慣があり、獨逸の商人など古くは此の方面に随分活動して居たのだが、その習慣は今に残つて居る。然るに一九二四年には農民は農業用品に夥しき欠乏を感じて居たに拘らず、國營工場に於て生産したる用具類を農民に賣付けることは到底出來難い狀況に在つたものだから、農民に對しては戰前の價格を以て三年乃至四年間の信用貸で之を賣つてやる外はなかつた。この道に依つて信用的に賣却されたものゝ價格は二千三百万留に及び就中千四百万留は内地產で九百万留は輸入品だつた。併しそれでも尚ほ農民の需要を充すに足らず一九一三年に之を獲た無生農用資本財の三割だけのものしか得る能はざる狀況だつたが、政府は生産費以下で之を賣却し多大の犠牲を拂つた爲め其翌年には大いに其額を減少するの止むを得ざるに會した。

何分にも露西亞の産業を復活せしむるには現今最も必要とせられるは資本であるのに、その資本が革命のために破壊され、又共產主義思想に依て貯蓄が抑制せられて資本としての生成を妨げられた爲めに、産業復活の事業は思ふほどに捗らず、爲政者をして焦慮せしめつゝある有様である。農村の狀況亦一般の狀況に異らず、資本の増殖と信用の發達と信用機關の整頓とが現今の急務として銳意之に向つて政府と民間との努力が向けられつゝある次第である。⁶⁾

6) Brutzkus, a. a. O. S. 200—202.
Tschajanoff, a. a. O. S. 35ff.

五 農産物市場

農業の資本主義的な發展を圖る爲めには、農産物の市場を整へ其機能を十分にすることが、甚だ重要であるが、露西亞に在つては従前とても農産物市場は餘り整備せる状態ではなかつたのに、戰時共產主義は一切の商的取引を禁じた結果、市場は全然破壊されてしまつて、農産物内地市場は一時消滅に歸してしまつた有様だつた。然るに新經濟政策への轉換の行はれると共に、市場に關する問題は當然に重要な問題として復活して來た。そして一九二二年の收穫期に至るまでは引續きたる不作の爲めに國民食糧の不足を訴へるほどの状況で、從來他の歐洲諸國への穀物供給國として立つて居た露西亞も、とても輸出のことなど問題となり得る勢はなかつた。

然るに一九二二年の收穫はかなりの豐作だつた爲めに、内地市場は既にこれを消化する能はざる狀況を呈した。内地市場の斯く狭くなつたのは、都市住民が著しく減少し、多數の市民が田舎に分散して自給的經濟を營むことを餘儀なくせられた事情に由るもので、殘留せる都會市民の購買力の減少も亦與つて力があつた。内地市場がどの位狭くなつたかといふに、戰前には現時の露西亞の版圖内に於て取引せられた穀物の量八億ブードだつたのに、一九二三年には穀物生産量は豊富だつたに拘らず僅かに二億八千萬ブードの内地市場賣買が行はれたに過ぎなかつた。後者は

實に前者の三割五分にしか當らないのである。

内地市場が斯くの如く狭小のものとなつた結果外國に對する販賣は従前よりも更に一層意義の大なるものとなるは當然のことであるが、それは國家の專賣事業として行はれるから、農民は直接にその恩恵に浴することはなくなつた。そして其の專賣組織が餘りに官僚的な爲めに多くの費用を要し、農民の手取の比較的少いことが非難された。穀物輸出に要する費用は一九二三年の秋に於て一ブードに就き七五哥といふことであつたが、就中鐵道運賃の爲に要する費用は二二哥に過ぎなかつた。戦前には此等の總費用一ブード三〇哥を出でなかつたのである。そして右の專賣費用は穀物價格の實に七割五分に相當したのだから農民の手取が如何に少なかつたかは言を俟たない所である。

爾來貿易專賣制度は大いに改善せられたことは確かだが、それでもまだ農民に満足すべき價格を保障し得ない狀況にありとせられて居る。

穀物以外の農産物でその輸出に特別の設備を要するものゝ状態は右に示す所よりも更に一層宜しくない。就中最も著明なものは鶏卵であつて、戦前露西亞はその輸出國として確乎たる地位を占めて居たのだが、之を回復することは中々容易ならざる實狀に陥つた。その他優良な菓の栽培も市場の整はない爲めに減少し、麻の如きも一九二四年の秋に於て一ブードの倫敦市價一八乃至

二〇留だつたのに農民の手取は八留に過ぎない有様だつた。斯かる狀況に對して農民の間に不滿の存するはいふ迄も無きことであると同時に、そんな狀況を以てしては外國輸出はとても内地市場の消化力の不足を補ふに足らなかつたのである。

加之農產物國內市場の組織が主として國家機關の手に屬して居るといふことも、實地の事情に十分適合するだけの働を表はし得ないで、さかく手の廻り兼ねる狀態に在つた。そして私的商業が其中に交はつて調節と補充の働をせんにも何分資本が缺乏して居てとても容易に思ふやうには行かなかつた爲に、内地市場に於ける農產物の價格は國有機關と國家に從屬する產業組合とが支配して居て殆んど獨占的決定權を握つて居たのである。

前に信用組合について之を述べたやうに、共產主義は產業組合運動とは其立場を異にし到底兩立し難きものと信ぜられて居たから、革命の成就すると共に露西亞の產業組合は頗る面目を異にするものとせられてしまつた。そして勞農政府は消費組合を以て國民に對する物品配給所となし、(一九一九年三月)他の產業組合はすべて消費組合の指導の下に立つべきものとし(一九二〇年一月)產業組合は従前のやうに自治的な獨立組織のものではなくなつて國家に從屬し中央より支配される官僚的組織のものにせられてしまつたのである。農村の產業組合も斯くて一時は一方農民に對する工業製品の配給所たると同時に他面には農產物の徵收所たる働を有するものとな

り、然かも農民が之に農産物を納めるのは受取つた工業製品に對する交換としてではなく、兩者の間に固より價格上の平均もなければ賣買的關係もなく、配給と收納とは別々の獨立のこととして全く共產主義の原理に従て行はれることになつたのである。然るに農民に對する工業製品の配給は製品不足其他の理由の爲に極めて僅かしか爲されなかつたものだから、農民は農産物を之に納入するを厭ふて段々餘分の農業生産を行はないやうになり、其結果終に一時農村の諸多産業組合例へば製油組合、畜産品加工組合、乾燥組合、製粉組合の如きは大部分業務を休止するに至つた。

其後共產主義政治が行詰るに至つてからは産業組合に對する政策も自ら變化することになつたが、然し新經濟政策は消費組合に對しては餘り立入つた干渉を試みなかつた。然る間に一九二四年には又彼の共產主義的反動が來て政府は消費組合を以て私的商業を壓迫する道具に用ゐんとしたが、之れ亦反動期の消滅と共に行はれなくなつてしまつた。

この波瀾重疊の間を潜つて露西亞の産業組合運動はともかくも命脈を維持して來たのであつて、其立場とする所に大いなる動搖はあつたにせよ、農村産業組合にしても其業務は相當に行はれたのである。即ち例へば一九二三—二四年に於ける農村販賣及び購買組合の取扱金高は四億留に上ばる有様であつた。

そんな風で露西亞の農産物市場は國家機關と産業組合との支配下に屬して居たのだが、其の組織の欠陥から農産物の價格は著しき變動を呈せざるを得なかつた。即ち一九二四年の二月には穀物の價格は前年秋に比して二倍に騰貴するに至り、輸出は國內市場の事情の之を適當とする程度以上に盛に行はれたが、一九二五年には政府は其の市價を抑へる爲めに却つて三千七百萬ブードからの多量の輸入をしなければならなくなつた。そしてかゝる穀價の變動は農民の爲めには決して利益ではなく、一九二四年春の著しき騰貴すら農民殊に小農民を苦むる所が少くなかつた。即ち小農民は租税を納める必要上秋には急いで穀物を賣らねばならぬから安い時期に賣るを餘儀なくせられるのに、春には高價な穀物を種子として買入れる必要に迫られる有様なのである。然し乍ら新々經濟政策は漸次其の地歩を固めて行くと共に、貨幣經濟は段々整頓することになり、貨幣經濟が整頓すれば市場も整ひ其働も圓滑になるは當然の成行であるから、農産物の市場も追々に復活する過程にあるは、疑なき所である。⁷⁾

六 農 家 經 濟

共產主義の理論には合はないけれど、とにかく新經濟政策が行はれるやうになつてからは、露西亞の國民經濟は漸次復活する氣運に向つて來た。その氣運は農業方面にも現はれて來たのだ

が、農業は恰も一九二二年が農作だったものだから、特に活氣を呈することになつたのである。そして、一九二四年には共產主義的反動のある所へもつて來て作物も不作であつたが、既に新經濟政策の下に大分地歩が固められて來たから、その爲に又折角の氣運が覆つてしまふことはなかつた。即ち一九二一年頃からは農民は一時自給經濟の穴の中にもぐり込んで居た状態から少しづつ、這ひ出るやうになつたのであつて、農産物市場はまだ甚だ整はない有様だったに拘らず、ともかく市場生産を行ふといふことが農民に餘分の生産を爲す刺激を與へた。

露西亞に於ける戰時以來の農作付面積の減少は一九二二年で底を入れた次第で、戰前に比較して作付地の減少は凡そ三分一に達したのだつた。その以後は漸次復活の曙光を迎へたが、何分にも戰爭に引續いて革命が行はれ、農地の手入は怠られ除草も施肥も十分にはせられないで居たものだから、さなきだに農地の生産率の低い露西亞の農業は更に著しくその率を減せざるを得なかつた。試に一九〇九年以後各五年間平均の一 *Dzjatine* 當り穀物收穫率を見るに

一九〇九——一三年

五四・九ブード

一九一四——一八年

五一・二ク

一九一九——二三年

四二・六ク

といふ有様で最初の五ヶ年平均に比すれば最後の五ヶ年平均收穫量は一二・三ブード(二割二分四厘)を減じたのである。

從て穀物の總生産量も著減せざるを得ず、其の數字は一九〇九年より一三年に至る五ヶ年平均の主要穀物生産總量四、五八一・八百萬ブードだったものが一九一四―一八年平均四、二四一・六百萬ブードに減じ其後各年の生産量は

一九一九年	三、五二四・一
一九二〇年	二、七九四・〇
一九二一年	一、九六九・〇
一九二二年	三、二五七・〇
一九二三年	三、一七〇・〇
一九二四年	二、六二二・八

で新經濟政策が行はるゝに至つてからでもその以後四年間の平均收穫量は二、七五四・七百萬ブードに過ぎず、戦前に比すれば四割方少いのである。

其他馬牛羊豚等の飼育數も夥しき減少を示した。

そんな状態であるから、農民の實際生活に於ても事情は中々容易に改善せられず、戦前に比し大分劣つた生活に甘んずる外はなかつた。即ち一九二四年に至るも尙ほ農民の消費する種々の日用品の量は戦前に比し少きは五分二多きも四分三に過ぎなかつた。試に主なる數種の品物に就いて見るに一九一三年に對する一九二四年の人口一人當り推定消費量歩合は、

搥	七二%	(單位封度)	紙	三六	(封底)
罽寸	六一	(箱)	砂糖	三三	(同)
煙草	四七	(喫煙單位)	錫鐵	二二	(アード)
石油	四〇	(アード)	銅	二二	(同)
棉製品	三九	(アルシン)			

といふ有様であつた。之は總人口に涉つてのことであるが、農民の消費狀態は都市住民のそれに比して著しく劣つて居ることを見通してはならぬ。之れが爲め無産階級支配の政治はやはり資本主義に於けると同様に都市住民の利益の爲めに田舎住民を犠牲にするとの譏の起るを避得なかつた。一九二四—二五年に於ける主なる工業製品の都鄙住民一人當り消費比較を示せば左表の如きものであつた。

品目	單位	平均	都市	田舎	田舎消費量の對 都市消費量歩合
鹽	封度	二二・九	二五・〇	二二・〇	八八
罽寸	箱	一七・〇	四八・〇	一〇・〇	二一
石油	封度	九・一	三〇・六	五・〇	一六
棉製品	メツツ	一一・四	三九・〇	六・二	一六
砂糖	封度	一一・四	四〇・〇	五・八	一五
金屬製品	留	二・二	七・七	一・九	二七

搥を除く以外は田舎住民の消費量は都市住民の消費量の二割若くはそれ以下といふ著しい有様を呈し、搥ですら八割八歩を消費し得るに過ぎなかつた。勞農政府は都會の住民に成るべく安價な

る食料品を供給することには大いに注意し努力する所があつたが、田舎住民の爲に工業製品を安く供給することには力及ばず、工業の不振と其の生産費の騰貴との爲めに、田舎の住民は高き工業製品を然かも不十分に買取り得るに過ぎなかつた。都會に在つては勞働者の賃金は生活に必要な物價指數に適應して定められたから、其の生活には餘り多くの困難なく、社會主義的經濟に直接参加せる者は其生活に對して顧慮が拂はれたけれども、農民に對してはどうか注意と施設との及ばなかつた嫌あるを免れ得なかつたのである。

農民の中に在つても共產主義革命以後に在つては比較的大きな農民の經濟が抑壓せられた爲め、其大部分は分解して、之に屬して居た人々は各々分立して小經濟を營むやうになり、其の經濟は貧弱で其生活はみぢめなものたらざるを得なかつた。

仍て少しく又露西亞に於ける農業經營狀態について見るに、その大部分は戰前から既に自家勞働を以てする小農經營に屬して居たのであつて、歐露四十九縣の穀物作付地の一割八厘だけのものが他人の勞働に依て生産を行ふ大農業に屬して居た。そして所謂大農地の總面積中三分二は小作に附せられて居た。大體に於ける農地經營上の分配の狀況は次表のやうであつた。

百萬 Dessjat.

農民自作地

1110.11

72.5

小作地

110.0

111.1

論叢

露西亞の新經濟政策と農業

第二十四卷

五〇九

第三號

六五

自己經營に屬する私有地	一三・〇	七・八
國有地	五・二	三・一
都市有地	六・〇	三・七
寺院有地	一・六	〇・八
合計	一六六・〇	一〇〇・〇

革命の結果私有大農地經營といふものはなくなり、その代りに國營といふ新形式が表はれたのだが、併しそれはたゞ僅かに試験場的な働を爲すに過ぎないで其の生産上に於ける意義は殆んど論するに足るまでに立至つて居ない。そして自作農地の大部分は原則として自家勞働に依て經營せられるのだが、その收益と従て農家經濟とには少からざる徑庭あり、自作農家にして他人の勞働を使用するものも少からず、やゝ大なる經營を爲すものは季節的移轉勞働者を雇ふか、小農民を雇ふかして居たのである。雇傭勞働は北部地方よりも南部地方に於て多く行はれた。

そして露西亞農業の特色の一是勞働集約經營の行はれることであつて、一單位面積に於ける農業生産費の比較からいへば、歐露の農業と亞米利加の農業とは大體似たものであるが、前者は後者よりも三倍多くの勞働を用ゐるのである。然し實際的にはそれは少し勞働集約に過ぎたる嫌あるを免れ難く、勞力の利用の上からいへば農村人口の有する勞働力の三分一が有効に用ゐられて居るに過ぎざるものと信じられる。この状態は我國の状態とよく似て居り、その意味に於て農村の人口過剰が言ひ得られると同時に、農業經營の資本的缺乏を否定し難く、その改善策としては今少しく勞働を節約して資本的に集約にするを要するものとせられる。

そんな風だから露西亞農民の勞力に對する報酬は比較的僅少なを免れず、固より地方により相違はあるが、平均的に之を見て戰前歐露に於ける農民一人當り勞働所得は五四・七留に過ぎなかつた。然るに戰時中から革命期に引續きその僅かなる報酬も更に減少し、一九二四年に於ては一人平均四三・二留を出でざる有様になつてしまつた。然らば農家一戸の經營收益はといふに、一九二二—二三三年の家計々畫によれば經營面積の大小に應じ大體次表の如きものと計算せられた。(金額は戰前の留價により示す)

經營規模 (Desjatin)	農業純收益	他 收 入	收 入 合 計
〇・一 — 一・〇〇	一二三・一八	七五・〇五	二〇二・二三
二・〇一 — 四・〇〇	二一〇・五七	七二・三八	二八二・九五
四・〇一 — 六・〇〇	三〇〇・一一	八四・五〇	三八四・六一
六・〇一 — 八・〇〇	四一三・三一	一一七・五二	五三〇・八三
八・〇一 — 以上	五二七・六〇	六五・六九	五九三・二九
平均	二六七・四六	七九・九五	三四七・四一

即ち經營規模の大きなものほど收入は當然に多いのだが、併し前に示したやうに露西亞の農民には小農經營者が多く二Desjatin以下を經營するもの最も多數なるを思へば、農家の大部分は實に僅少な所得に甘んじて居ることがわかる。年收入合計僅かに二百留餘りなるを見る有様である。我國の農家收入も少いが露西亞の農家收入も洵に少いものではないか。然かもそれは農業以外の收入をも加へての話で、若し農業からの純收益だけを見れば、其額は更に少く僅かに一二三

留に過ぎない。試に各經營規模に於ける農業純收益が收入合計に對する割合を示せば

〇・一一—二・〇〇	六〇・九〇 %
二・〇一—四・〇〇	七四・四二
四・〇一—六・〇〇	七八・〇三
六・〇一—八・〇〇	七七・八六
八・〇一以上	八八・九三
平均	七六・九九

最も小規模なる農業を營む者に在つては農業からの收益は僅かに六割強に過ぎない。それはつまり農業だけやつて居たのでは食へないで、他に收入の道を講じそれで漸く生きて行けることを示すものである。然るにや、大規模の經營を爲す者とても亦農業以外他に收入を求めて居ること右表の如くなりとせば、要するに露西亞に於ける農業人口の過剰といふ事實を知ることが出来る。同時に農民一般の農業收入の如何に少くその生活の如何に貧弱なるかを知るを得る次第である。

併しとにかくにも農民は自己の勞働と業務とから麵包を獲ることが出来るのであつて、働かさへすれば大底餓死することはなく、其の意味に於ては農業といふ業務ほど安全な業務はない。露西亞の農民はこの安全なる嚴礎にかちりついて共產主義の大革命といふ狂瀾怒濤を切りぬけて來たのである。そして新經濟政策の確定は漸次農業の復活と新たなる發展を促しつゝあれば、今後は徐々なりとも多少づゝは露西亞の農業と農民との状態は良くなるものと信じ得べき理由ある次第である。(終)

8) Brutzkus, S. 219—221; S. 231—240
Tschajanoff, S. 36—40
統計表は主として後者に據る。